

今日の福音書は、フィリポとナタナエルが、イエス様の弟子になったお話です。ちょうど、それに呼応するかのように、旧約聖書では、少年のサムエルが、祭司であるエリ先生のところで生活していたのですが、神様から呼びかけられて、神様の言葉を人々に伝える預言者になるきっかけの出来事の所を読みました。神様がサムエルに呼びかけられたのですが、サムエルは祭司であるエリ先生が自分のことを呼んだのだと思って、先生のところへ行きました。しかし、エリは呼んだ覚えがないので、休むように言います。こんなことが三回もあったので、祭司のエリ先生は、「これは、神様がサムエルを呼ばれているに違いない。」と悟って、神様の声を聞くための言葉をサムエルに教え、「どうぞお話しください。僕は聞いております。」という最後の場面になったわけです。

このサムエルが神様の言葉を聞く姿勢をしている絵が、有名になったのですが、私は子どもの頃から高校生になるまで、あれは女の子が祈っている絵だとばかり思っていました。

さて、新約の方は、イエス様が弟子たちを集めるために声をかけるのですが、このヨハネによる福音書は、他の3つの福音書とは、様子が違います。私たちは、ペトロとアンデレ、ヤコブとヨハネという二組は、それぞれ兄弟で、一緒にガリラヤ湖で魚を獲っていた、漁師でした。漁を終わって、網を洗っている所へ、イエス様が来て、「私について来なさい。」と言って、弟子にしたのを印象深く覚えています。特に、ルカによる福音書では、夜じゅう漁をしたのに、獲れなかったけど、イエス様に言われて、太陽が昇る昼間に、漁をすると、たくさんの魚がとれた、という奇跡物語が一緒になって、「これからは人を獲る漁師になる」という話でした。

ところが、このヨハネによる福音書では、最後の21章で、弟子たちは復活したイエス様と出会い、ガリラヤ湖で、漁をするとたくさんの魚が獲れる話は出てきますが、最初の1章では、漁師だったことなど全く書かれていません。そうではなく、アンデレと、もうひとり名前は隠されていますが、ヨハネのふたりは、洗礼者ヨハネの弟子だった、という設定になっています。そして、洗礼者ヨハネから、イエス様こそが、「世の罪を取り除く神の小羊だ。」と紹介され、彼らはイエス様の弟子になるのです。

そして、アンデレは自分の兄弟をイエス様に引き合わせると、兄弟のシモンにはケファ（岩・ペトロ）というあだ名がつけました。BSA聖アンデレ同胞会という団体が聖公会の中にありますが、それは、アンデレに倣って、友だちをイエス様の所に連れて来よう、という男子青年の活動としてアメリカ聖公会から始まった活動です。

そこから後が、今日の所です。今日の所では、フィリポとナタナエルが弟子になるのですが、フィリポの方は、簡単に弟子になっています。イエス様から「わたしに従いなさい。」と言われただけで弟子になっているようです。でも、44節に「フィリポは、アンデレとペトロの町、ベトサイダの出身であった。」と書かれていることに注目しましょう。

おそらく、アンデレとペトロの兄弟のことは、以前からよく知っていて、信頼を置いていたのでしょう。「彼らが弟子になるくらいだから、先生は立派な人に違いない。」と信じて弟子になったと思われます。

そして、ナタナエルに「わたしたちは、モーセが律法に記し、預言者たちも書いている方に出会った。それはナザレの人で、ヨセフの子イエスだ。」と言います。フィリポは、イエス様のことを、昔から旧約聖書に約束されている救い主メシアであることを確信しました。そして、一番仲のいい、ナタナエルに知らせなければ、と思ったのです。

ところが、ナタナエルは、人の言葉だけですぐに決断する人間ではありませんでした。フィリポが、イエス様のことについて、そのように語り掛けても、「ナザレから何か良いものが出るだろうか」と、気の乗らない返事をするのです。

ここで、ナタナエルのことをもう少し説明しておかなければなりません。

この福音書の終わりのところ。21章を見ると、「ガリラヤのカナ出身のナタナエル」という表現が出てきます。カナと言えば、イエス様が結婚式で水をぶどう酒に変えた町です。その話は今日の福音書の後で出てくるのですが、もうひとつ大切なことがあります。それは、このカナという町は、イエス様の育ったナザレと隣り合わせ、山一つ越えたところにある町です。

「救い主は、ナザレの人で、ヨセフの子イエスだ。」と言われたって、信じられなかったでしょう。ナザレなんて、旧約聖書のどこにも地名が出てきません。カナという地名は、地中海沿岸の別の町ですが、1回ヨシュア記19章28節に登場します。でもナザレは出てこない。それより何より、救い主は、ベツレヘムに生まれる、ということが聖書に書かれているのに、ナザレの人が救い主だなんて、信じられない、という意味で、「ナザレから何か良いものが出るだろうか」と言ったのです。

これを聞いたら、もうフィリポは、「こんな理屈っぽいやつには、百聞は一見にしかずだ。」と思ったんじゃないでしょうか。「来て、見なさい」と言って、イエス様の所へ連れて行ったのでしょうか。

自分の言葉では十分伝えられない時、わたしたちはこのフィリポのように、「まあ、一緒に行ってみませんか。」という誘い方もあるのかなあ、と思ったりします。

さて、その後のイエス様とナタナエルの会話は、まともな会話としては理解できません。イエス様がナタナエルのことを「見なさい。まことのイスラエル人だ。この人には偽りが無い。」という高い評価をして語ると、ナタナエルは「どうしてわたしを知っておられるのですか。」と答えます。

このナタナエルの反応からすると、イエス様のナタナエルに対する評価はズボシで、自分のことを見透かして言われた、ということでしょう。では、そのときイエス様が言われた、「まことのイスラエル人だ。この人には偽りが無い。」とは何を指しているのでしょうか。

これは、祖国イスラエルが神様に赦され、メシアが来て、救いが実現するのを、ナタナエルは待ち続けていた、敬虔なイスラエル人だということです。

詩編32編2節に「いかに幸いなことでしょうか。主に咎（とが）を数えられず、心に欺（あざむ）きのない人は。」という表現が出てきます。また、イザヤ書53章9節にもあります。

「彼は不法を働かず、その口に偽りもなかった。」という苦難の僕をも思い出させる言葉です。ナタナエルが、「どうしてわたしを知っておられるのですか」と言うと、イエス様は、「わたしは、あなたがフィリポから話しかけられる前に、いちじくの木の下にいるのを見た。」と答えられます。

この答えにナタナエルはびっくりして、「ラビ、あなたは神の子です。あなたはイスラエルの王です。」と答えます。

イエス様はナタナエルを「まことのイスラエル人」と言い、ナタナエルはイエス様を「イスラエルの王」と表現するわけです。お互いの立派さを認めた称賛の言葉です。

それじゃ、ナタナエルが「いちじくの木の下にいる」のをイエス様が見たことに、どんな価値があるのでしょうか。ある注解書によると、「パレスチナ地方ではいちじくの木はかなりの大木に成長し、その日陰でラビたちが弟子たちを教えたことを考え合わせ、ナタナエルが律法を熱心に学んだ者であることを暗示している、と多くの学者は理解している。」と書かれていました。

単にナタナエルの姿を見たことがある、と言うよりも、彼が熱心に旧約聖書を読み、救い主が現れるのをずっと期待を持って待っていた。そんな彼の普段の信仰生活を、イエス様がお見通しだったことに、ナタナエルは感動したのだらうと思われます。

でも、イエス様は、このあとナタナエルにもっとすごいことを語られました。「もっと偉大なことをあなたは見ることになる。天が開け、神の天使たちが人の子の上に昇り降りするのを、あなたがたは見ることになる。」これは、創世記で、ヤコブがベテル（神の家）で、天国と地上を天使たちが昇り降りするはしごの夢を見たことを思い出させますが、まさに、イエス様は、神様から遣わされた、神様と特別な交わりを持った方である、という結論です。

このことから、著者のヨハネが言いたいことは何でしょう。イエス様は、弟子になるナタナエルだけでなく、私たちのことをひとりひとり、頭の髪の毛の数まで知っておられ、良い所も悪い所も知った上で、私たちが弟子にし、それぞれを受け入れ、神様、神の国に出会えるように導いてくださる、ということでしょう。

それでは、私たちはナタナエルの生き方から、何を学ばばいいのでしょうか。

私は、イエス様が「わたしは、あなたが、いちじくの木の下にいるのを見た。」と言われているのに注目したいと思います。私たちもナタナエルのようにいちじくの木の下を見つけて、神様のこと、自分の信仰を見つめる場所と時間を確保することが大切ではないでしょうか。

私が昔訳した本で黙想に使う「Calling you」（神様があなたを呼んでおられます！）というのがありますが、各単元の最初に「ひとりでじっとしている時間を持ちましょう」とか「考えるために静かな場所を見つけましょう。」などの指示が書かれています。ナタナエルがいちじくの木の下で信仰を深めたように、みなさん、ご自分の家で、信仰を深めるために、静かな場所と時間をとり、神様からの声を聴く機会を作っていただきたいと思います。